

ふるさと風

第76号 (2012年6月)

風に吹かれて (54)

白井啓治

『達成感は素直に喜びの表現を連れて』

一番気温の上がる午後の二時ごろであつたろうか。お犬様が吠えた。誰かが来たという。出てみると打田兄であつた。

「書き上がりました。1066枚。完結です」達成感に満ち溢れた爽やかな青年のような笑顔であつた。打田兄に千枚の物語に挑戦してみませんか、と話したのは2010年の秋を迎える頃ではなかつたらうか。

千枚の物語を書くというのは、千枚でなければならぬテーマと題材が必要となる。先ずはテーマをどう見つけるかが千枚挑戦への第一歩である。打田兄の探り当てたテーマは「歴史の嘘」であつた。このふる里に関係の深い様々な歴史的な話に隠された、というか真実を嘘で塗りこめたとと思われる事にスポットを当てて、打田史学の考える真実検証への挑戦であつた。特に我が石岡の大好きな歴史の勝手な権威づけに対する批判としての検証は大層面白く書かれている。

この会報にも、特別企画として連載をしているがまだ半分ぐらいの掲載である。連載の終了を待たずに文庫本にしなればと考えている。

先日、新聞にこんなことが書かれていた。国民生活に関する世論調査の結果なのだそう。『心』と『物』のどちらが大事かといった意識調査なのだそうであるが、『心』と答えた人が2,6ポイントアップし、『物』と答えた人が0,9ポイントダウンしたのだそう。そして、この事が非常に人間として良い方向にあるとしたコメントのようなものが載っていた。へそ曲がりな小生は、読んだ途端「？」と思つてしまった。

戦時中「欲しがりません勝までは」と強制され「贅沢は敵」と言われていたのであるが、こんな中、ある作家が「贅沢は素敵(素敵が本来素敵は当て字)」と言つた。これを思い出しながら、人間の生活の中で「物」より「心」と考えるのが当たり前で高貴という感覚は何処から生まれるのだろうかと思つてしまった。捻くれ者と言われるかもしれないが、心と物のどちらが…、と比較することのナンセンスという外的外れというか、笑つちやいますのである。

心と物はあくまでも一体のもので、どちらが上下、重軽と比較するものではない。心があつて物が生まれ、物が生まれて心が更に豊かになつて行く。そういう関係である筈なのだが。

物の事をお金と言い替えて言う人もいる。そして、お金を卑しいと言つたりする。お金を卑しい

と言う人ほどお金で何でも買おうとする。汗を流して自分で必要なものを作ろうともしない。こんな風に考えていくと、日本人は皆我欲だけの政治家と同じになつてしまったのか、と言いたくなる。東日本大震災以降「絆」だとか「思いやり」「支え合う」などの言葉が頻繁に使われるようになったが、気持ちの良い響きとしての言葉になつてしまつていて、全く実のない言葉になつてしまった。特に「絆」などは源流帰りして、家畜を紐でつなぐになつてしまつてゐる。実に悲しい。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

院内・黒川

キンナイ(飲めない川)・クロカワ(飲める川)

語源・所在

県南部の平地は、縄文海退でつくられた泥湿地でなりたっている。そこは葦原に代表されるように、出水時には氾濫原となる場所であった。普段も濁り水が流れている川が多いので、良質な飲料水を見分ける必要があった。飲料不適水をアイヌ語では【wenpet 悪い川】(北海道に宇遠別川あり)とか、【wenay 悪い川・沢】(JR千歳線に植苗駅あり)と言う。本州には院内・印内などの地名が大小三〇以上もあり、秋田県の院内の語源説にこのwenayがある。それが茨城にもあてはまりそうだ。ワ行音をローマ字と片カナで表記すると、waフ・wi・キ・wuウ・weエ・woヲ・eのiの区別があいまいであるから、wenay エンナイ→winay キンナイ。それに漢字をあてはめると院内(旧カナでキンナイ)。つくば市の旧谷田部町内に大字高須賀、今も小貝川の乱流跡が残るそこに、小字で**院内**。しかも、高須賀の中には「丁寧」にも、wenay の直訳に近い**悪水**や**悪水向**等の**悪水**小字名が6。さらに、上谷原(谷原:軟湿地)・下谷原・猿久保(猿:葦原、久保:窪地)・浮貝(腐り貝)などの小字名が目白押し。隣の高良田にも**悪水**小字名2。つくばみらい市旧伊奈町内の大字小張に、小字の**院内**・院内久保・院内道付、福田に**悪水**小字名2、下島に1。人々の福田に寄せる願望と**悪水**という現実が今も伝わる。江戸時代の県の南西部では、洪水の後、田畑から水が引かずいつまでも滞留している腐れ水を**悪水**と言っていた。ほぼ同地域にある院内も飲料に限定せず、**悪水**と同じ意味で使われていたようである。取手市**清水**乙に皮肉にも

悪水附(ツカ、稲敷市上須田に**悪水**、**悪水下**、筑西市菅谷に**悪水**、八千代町にも**悪水縁**フチ。

一方、水質検査合格の方は、【ku 飲む】【wor 水】【o】ちやちやある↓湧き出している【pet 川】というレットルで呼ばれた。それは、w-u、連母音の単母音化、語尾消去母音化でkuworopet、黒四ダムのある黒部川がそれ。神栖市の利根川対岸、千葉県東庄町にも黒部川があるが由来は何であろか。茨城では筑西市島にpetを川に翻訳した**黒川**。高萩市島名に川を沢に替えた黒沢内、東海村石上外宿にも黒沢内と黒沢前、つくば市沼田に黒内がある。内の読みはウチかと思われるが、それでは意味がつかみにくい。語源的には、ナイ(nay 川)であった可能性もある。

転音

wennai→winai kuworpet→kuworopet

駄弁

旧伊奈町・谷和原村…江戸時代初めまでの、つくばみらい市域は、鬼怒川と小貝川が合流し、一面に葦の生い茂る低湿地、いわゆる谷原であった。1625年には関東郡代(関東の諸代官を統括する代官頭 伊奈忠治が開発に着手し、鬼怒川・小貝川の分離、福岡堰の前身である山田沼堰や現取手市の岡堰の設置、用排水路の掘削、小貝・鬼怒川の長大堤防の敷設など治水・干拓に尽力した。その結果、「谷原三万石」と称される新田地帯が成立した。しかし、その後も大水まわし(洪水)が繰り返えされ、福岡堰と小貝川堤防はたびたび決壊した。小貝川は田畑を荒らし、腐れ水が田畑に居座り続け、人々を苦しめた。人々は忠治の功績に感謝しながら力を合わせて水患と戦った。小張地区の小字**院内**や福田・下島の**悪水**という言葉にもその苦悩がうかがえる。旧町名の**伊奈**は、開発に尽力し

た伊奈忠治の業績を残し伝えようとしたものであり、**谷和原**は谷原・十和・福岡・小絹(小貝川・絹川の合流地?)の四力村が合併した際に旧谷和原村を中核にして和をもって新村発展に努める意から谷原に和を加えたという。しかし、平成になり、両者はその名を捨てて、つくばみらい市となった。だが、みらい市の市民となっても村民たちは過去を忘れ去ったりはしない。福岡堰の近くに小さな社が佇んでいるが、市民たちは気にとめることはない。しかしその伊奈神社では、村民の有志が、毎年初めて田に水を入れる四月一日に忠治の子孫を招き、彼の業績を讃え、豊作を祈願しているという。また、岡堰の下方取手市毛有(ケアリ)の薬師堂は、忠治が目を患ったときに岡堰用水組合の村々の農民が、平癒を祈って建てたといわれ、現在でも忠治は取手開発の功績者として熱い尊敬を集めている。

ちなみに、水戸市下市地区の**備前堀**は、水田開発と千波湖の溢水予防を目的に彼の父、伊奈**備前**守忠次によって開削された用排水路である。

エゴ・エゴタ

エゴ(窪地)・エゴタ(窪田)

所在

東海村石神内宿に**エゴ**、水戸市見川・常磐に**エゴタ**、同市河和田に江後田、鉾田町青柳に江古田、滝浜に絵後田・西絵後田・北絵後多・多古多・西多古多、つくば市柴崎に江子田、茨城町野曾に恵古田、霞ヶ浦市新治に江後田・江後田裏・江後田谷、江后田、江后田裏・江后田前、江子田・江子田前・江子田谷、同市下稲吉に江後田道、牛久市下根にえ久田・イゴ田、東海村須和間にいご田、石岡市野田・佐久、櫻川市門毛にイゴタ、下妻

市に大字**伊古立**、同市大園木・鯨に小字**伊古田**、北茨城市磯原大塚に伊後田。当て字はこれで全部かとみられたが、以後も、霞ヶ浦市に以後田裏・以後田前、茨城町越安に矢古田と続く。北茨城市を除けば、ほぼ県の中央部に所在しているが、取手市萱場の猿候（※猿の誤記であろう）田（エンコダ）も仲間に入りたい。東京都の練馬区・中野区にも江古田があった。

語源 中国や四国では、山の窪地、日当たりのよい山の窪地、谷、溝、狭い小路の奥などを言う。

かつて、県内でエゴタの意味を聞いた時、岡にはさまれた窪地のたんぼだ、という答えが返って来た。右の中国・四国のエゴの意味が生きている。ではそのエゴやエゴタの語源はなにか。【e 頭、顔】**【kot 凹み、凹地、谷間】**、あるいは、【e 頭、顔】**【kot 凹み、凹地、谷間】**【ta のところ】音節末子音の消去母音化、**ekot, ekotta**。いわゆるボンノクボが原形か。それをイゴ・イゴタで見ると、【i その】**【kot 凹み、凹地、谷間】**【i その】**【kot 凹み、凹地、谷間】**【ta のところ】であるが、**ekot (ta)** の e-i としておきたい。のちにもつばら田んぼの状態について使われるようになったので、田を当てるようになったと思われる。

転音 **ekot・ikot→ekot・ikot ekotta・ikotta→ekotta・ikotta**

駄弁 旧千代川村・石下町…鬼怒川と小貝川に挟まれた低平地であり、豊田谷原と呼ばれた氾濫原の北部に位置する旱魃と洪水の常襲地であった。その対策として、伊奈忠治は1635年に鬼怒川か

らの取水のために中居指・本宗道用水等を掘削し、旧鬼怒川跡の低湿地帯にいわゆる「悪水落し」としての八間堀川を開削した。その後、鬼怒川の水位が著しく低下したので、1726年には江連用水が掘削され、豊田はその名のように豊かな田園地帯に生まれ変わったように見えた。しかし、それも束の間、その後も鬼怒川の水位低下はやまず、各用水は廃溝化していった。水禍は下流にも及び、深刻な水不足や旱魃・飢饉に見舞われ、実力行使や「水争い」が起こるに至る。再三再四の請願や直訴により部分的な改善は見られたが飢饉は続いた。ことに1821年の旱魃は凄惨を極めた。この年と1823年には四度の請願を試みたが、いずれも取り上げられなかった。ついに意を決した荒川又五郎（豊田村・旧石下町）・猪瀬周介（三坂新田・旧水海道市）・稲葉儀右衛門（加養村・旧下妻市）の三名主は、老中首座水野忠邦への駕籠訴（直訴・ご法度）を決意し実行した。当時はやった狂歌に「水の出で元の田沼になりける そろそろと柳に移る水の影」。大水が出て元の田が沼になってしまった。という文意に、**水野**に改革を期待したが**田沼**意次や**柳沢**吉保の再来にすぎなかったのか。と重ねてからかっている。その水野に水のことで直訴したのが、のちに三義人と讃えられたこの三名主であった。偶然かもしれないが、水野の墓は下妻市の川向う、山川不動尊にちかい結城市山川新宿の万松寺跡にある。三人の努力が実って、1829年には「江連古溝再興工事」は完了した。しかし、役人の無責任な測量が災いして水は逆流し住民たちの努力は水泡に帰してしまつた。三人は幕府の見回り役市村宗四郎に励まされ、身命を賭し、全財産を投げ打ち、先頭にたつて農

民を激励し、出直し工事を敢行し、竣工式を迎える運びとなった。その席上、月洲庵の雅号を持つ文人役人の市村は、自作の句を三唱した。

「樋開きや豊田郡（コホリ）の千代の水」樋開きとは水道を開いて水を流すことだ。この瞬間から「豊田」はその名のおりの豊田となり、のちに、「千代の水」を受けて千代川村の名がつけられた。しかし、由緒あるその名もこのたびの合併で消滅した。なお、下妻市の大字伊古立、大字大園木および鯨の小字伊古田や、常総市（旧石下町）の大字小保川、下妻市（旧千代川村）大字本宗道・伊古田・長萱にある小字小保川などは深刻な水不足のなかで生まれた地名であつたろう。

小保川・豊田

オボカワ（深い川）・トヨタ（土

砂）

小保川 鬼怒川と小貝川間の低地にある常総市大字小保（オボ）川、下妻市本宗道・伊古立・長萱それぞれの小字小保川の**小保**はこの obo で、それは深い川であつたに違いない。日立市滑川町のオボ内（小保内）の原地形はどうであつたか。

豊田郡

和名抄に見える古い地名で、常総市（旧水海道市・石下町）・下妻市南部・八千代村を含む地域とされる。名前のような美田となつたのは江戸末期のことであり、命名当時は土砂が流れ込む低湿地であつた。となれば、豊田は豊田だから豊田などと言える筋合ひはない。ではその語源はなにか。アイヌ語で見ると、それは、【toy 土・畑・原】【ota 砂・砂浜】ということである。龍ヶ崎市にも大字豊田があり、福岡堰・岡堰とともに小貝

川三大江堰の一つ豊田堰が伊奈忠治によってつくられた。こちらの豊田の由来も同様かもしれないが、あるいは、願望が込められた命名かもしれない。

脳のパニック(2)

菅原茂美

文明が、いかに進化しようが、世の中から犯罪はなくなる。そして国際紛争も、残念ながら決して、なくなる。

これらの因果関係を、「人間の業(ごう)」とか「宿命」などという、あいまいな言葉ではなく、明確な心理学や生理学で、「だからこうなのだ」とはっきり説明できないのであろうか？ それが明確になれば、自然科学に基づいた療法なり、対処法が開発されそうな気がする。

人間の脳で、一番遅く進化を遂げ、「おでこ」のすぐ内側にある「大脳前頭前野」は、「意志決定」「洞察」「企画」などを司り、人間を人間たらしめている中枢の分野である。

その前頭前野が、人間行動の全てを完全に支配していれば、日常報道される、いまわしい事件等、社会面から消えてなくなるであろう。

ところが、その中枢分野に対し、活発な人間活動の「歪み」として生じた「ストレスの蓄積」等が、パニックを起こし、大脳の深奥部にある原始的な「扁桃体」「線条体」「脳幹」などの「旧脳」が反発し、本能丸出しの行動を起こさせる。犯罪や紛争の源は、脊椎動物誕生以来、生命活動の基本をなす原始的な「旧脳」が、アドレナリンなど

覚醒化学物質を分泌して、後から進化した大脳前頭前野(新脳)の働きを抑え、本能の赴くがままの行動を優先させる。ここまでは、近代科学で、明確になってきたことを、前月号で紹介した。

そして、ここが大事な事だが、この厄介な覚醒化学物質を、速やかに分解する酵素の分泌は、個人により大きく異なる。即ち、覚醒化学物質を分解する酵素を分泌して、直ちに正常な人間らしい行動に引き戻すか、或いは逆に、その分泌機能が不十分で、本能(食欲・性欲・暴力等)が勝り、犯罪行動にストップをかけにくいかは、その人の分解酵素を分泌する「遺伝子」の働きのいかんにかかってくる...ということが分かってきた。

しかしこう述べてると、あたかも犯罪は、遺伝が関与している...と聞こえるかもしれないが、人間行動は、遺伝子支配は勿論大きいですが、日頃の「習慣」や「訓練」により、かなり大きく支配されている。天才の子は、必ずしも天才にはならない。名もない親から、超エリートも生まれる。

【人の場合、一卵性双生児は、両者、遺伝子は全く同じだが、生育環境が甚だしく異なれば、能力や性格は、まるで他人みたいに異なる。

又、クローン動物の場合、成体(A)の細胞から、「核」(遺伝子の全て)を抜き出し、受精卵の核とすり変えて再び子宮に戻すと、生まれる子供の遺伝子は、(A)と全く同じである。体毛の色の配色など親そっくりのはずである。ところが、猫の場合、体毛色を決める遺伝子は100もあり、卵の細胞分裂の過程で、どの遺伝子が先に発現するかにより、親と100%同じ遺伝子でありながら、全く親と違う配色の子が生まれる場合もある。

ある富豪が、自分の細胞の核を受精卵の核と入

れ替え、凍結保存し、仮に百年後に復活するとしても、(A)の段階では隠れていたつまらない遺伝子が優位に発現すれば、元の富豪の面影はない。】

同じく、長寿の遺伝子など、カロリー過剰な食習慣では、その機能がブロックされ、短命に終わる例もある。逆に長寿の遺伝子はないが、適正な食事習慣で運動が程良く行われていれば、驚くほどの長寿を全うする例もある。その証拠は、かつて沖縄県は、長期間、長寿日本一であった。そして長寿の遺伝子を持つ割合も多かった。ところが、米軍に勤務する人口が増え、米国式の高カロリーの食事習慣が身に付くと、たちまち長寿番付は、現在、国内第26位に下がってしまった。このように、環境支配が遺伝子の働きを抑える事例もあるので、才能など、一概に遺伝子支配と決めつけて、努力を怠る方が、ずっと害が大きい。

【そこで私式「子供の才能を予測する方程式」...一般に、子供への遺伝は、両親や祖父母ぐらいまでしか頭にならないようだが、本来、遙か祖先まで遡るものである。さりとて無制限というわけにもいかないのです、私の提案。

両親↓祖父母↓曾祖父母↓...と直系の先祖を、調査可能な5代ぐらい遡れば、2の5乗 2^5 32人となり、この32人の業績などを足して 2^2 で割れば、およそ子供の将来が見通せる。5代の先祖の中に、優れた人が多ければ多いほど、その子に優れた遺伝子が蓄積されている可能性が高くなる。逆に、病気になるやすい体質や、反社会的行動などマイナスイメージの遺伝も同じ事。

そして人の能力は、決して遺伝だけではないので、むしろ積み重ねた努力がものを言う。ゆえに、親が子供に期待するなら、遺伝としては先祖5代

ぐらいまで遡り、その平均点を出し、後は、子供が勉強しやすい環境を、無理なく整えてやる……。急がず焦らず、大器晩成を狙う。

なお遺伝学を、くどくど述べるつもりはないが、両親の同じ機能を持つ遺伝子は、父か母方のどちらかが強く働き、一方が抑え込まれる事がよくある。それが1代か何代も続いたりして、突然、子孫に表現される事もある。それが「隔世遺伝」や「先祖返り（多指症、副乳、多毛症）等である。」

* * * * *

さて、脱線し過ぎたが、『俺はどんな事態に遭遇しようとも、一度も、頭が真っ白になった事などない』と、豪語できる人は、殆どおるまい。

例えば、事故や病気で落命寸前。信じていた人に背かれる。最愛の人を突然亡くす。命をかけた〇〇試験に不合格。交通事故寸前。女性なら暗闇から突然巨漢が現れ立ちはだかる。すぐ側の大木に落雷等々。ま、長い人生の内には、背筋の凍るような恐怖に遭遇する事はしばしば。こんな目に合うと、普通の人なら冷静さを失い、パニックに陥り、何をどうしてよいやら慌てふためく。野生時代は、毎日がそういう事の連続であつたらう。

このような事態に陥った時、人間の「脳」の生理学的状態は、どのように説明されるのか？

私は単細胞なので、常に物事の根源はどうなっているの？ と、ゴンボ掘りを始める。特に人間行動について考える時、その根源となっているホルモンや酵素など、生化学については、そのメカニズムを徹底して追求したい。「愛と憎しみ」その時、大脳の生化学はどうなっているのか？ そして、行きずりに美人を見れば、北方系・南方系どちらの縄文人の末裔か？ などと、つまらぬ詮索

を始める。そのDNA配列が気にかかる。黙って鼻の下を長くし、見とれていれたいのに……。

人はパニックに遭遇した時、行動を決定づけるものは何か？ その時、大脳の命令系統は一体どうなっているのか？ と長年疑問に思っていたところ、その解答が、最近、科学雑誌に掲載されていたので、我が意を得たり……と、納得した。

その解答は、前月号で、大方を述べた。今月号ではその不足分を補充したい。即ち、人類の祖先が、直立二足歩行を始めて700万年。猛獣がうるつくアフリカのサヴァンナで、化石時代の我々のご先祖は、幾多の同胞が命を奪われ、常に飢餓と恐怖の連続であつたに違いない。当時の人類は、今ほど体は大きくない。肉食獣の格好の餌食であつたらう。その長い体験が自然と身に付き、『習い、性となる』。(英語でもHabit is a second nature. 習慣は第二の天性なり……)

猛獣に遭遇したこんな時、一々理性を支配する新参者の大脳前頭前野に、お伺いを立てていたのでは、間に合わない。脊椎動物として、魚類時代からの原始的な脳が、即戦即決で、その都度判断を下す。逃げるか戦うか、又は死んだふりをするか。瞬時にしてホルモンや神経伝達物質の連携プレーで、結論を出す……。即ち、原始的な「脳幹」から、ノルアドレナリンやドーパミンという覚醒化学物質を、更に、副腎からコルチゾールというホルモン(抗炎症作用)を分泌し、戦闘態勢を整える。後から進化した大脳前頭前野の高尚な判断など、でしゃばりを抑制する。それが野生を生き抜く習いだ。人は、今でもそれを引きずっている。

なるほどそれなら話は分かった。ストレスなど蓄積している時、人は通常の神経では考えられない

い非常な行動をとる事がある。要するに原始的な脳が前面に躍り出て、本能行動に突っ走る。

人類は万物の霊長などと自称自賛しているが、こんな野蛮な行動が、世界中至る所で、満ち溢れている。その源は、文明が作り出した競争社会↓ストレス蓄積↓理性喪失↓反社会的行動↓暴力。

この一連の反応が、文明進化が抱えている内部矛盾の現れと見ればよいのだ。そう考えれば、人類の現状は、より高尚な高等動物への発展途上の動物であることがよく分かる。要するに現状の人類は、ヨチヨチ歩きの内矛盾を抱えた、野生時代の現実を、モロに引きずって生きているのだ。

* * * * *

以前にも書いたが、人類の肉体構造は、こんな厳しいアフリカで生存するためには、あまりにもその機能は、「おそまつ」すぎる。人体は、「神様の失敗作」である。野生動物に比べ、俊敏さにおいてあまりにも鈍すぎる(オリンピック級の選手など、かなり俊敏ではあるが……)。

動物と向き合つて、逃げるにしろ、相手をやつつけるにしろ、瞬発力があまりにもなさすぎる。腕力・脚力・背筋力など、動物の赤子並だ。

大体にして、扁平(ひらぺこ)では、動く相手を捕まえるのに、鉤爪(かぎづめ)にかなうはずもない。それに肝心の犬歯は、オマケみたいなもの。こんな犬歯では獲物を捕獲できない。

気候変動などで、原始の森はサヴァンナに化し、樹木が少なくなり、やむなく、樹上生活から地面に降りた人類の祖先。動物を捕まえやすい鉤爪や、犬歯の長大化に、進化する時間は足りなかった。

次に、人類は非常に「視力」が弱い。人類も野生時代は、多分、老眼になる前に寿命を終えた事

だろうが、老眼で焦点が合わない野生生活など、考えられない。通常、動物は生殖年齢までが寿命である。それ故、動物は動脈硬化・高血圧・認知症などは、あまり見られない。人類の成人病の数々は、長生きしたために支払う税金のようなもの。

そんなわけで、野生の現場では、猛獣から逃げるにしろ、獲物を見つけ、そつと近づくにしろ、強力な視力が絶対必要はず。これも樹上生活なら、木の葉などで見通しは利かないので、それほどの視力が必要なかった。しかし地面に降りた人類の祖先は、遠方を見渡せる視力の構造改善の時間はなかったであろう。進化にとって700万年は短かすぎること。

そして「嗅覚」も鈍い。犬の足元にも及ばない。霊長類として育ってきたジャングルなど、見通しの利かない立地条件では、視力は、ほどほどでよい。その代り、嗅覚や聴覚で情報収集する。これらがもつと発達していれば、いつも肉食猛獣の餌食にばかりはなっていなかったであろう。地中のイモ類など、いつもイボイノシシにお先をされずに済んだであろう。更に「味覚」も鋭敏とは言えない。その証拠は、いくら知能が進んでも、毒茸を舌先で弁別できず、毎年多数の人が中毒になっている。野生の動物は、有毒植物など、すぐ感知し、よしんば、口に入れても、すぐ吐き出す。

更に「触覚」だっていい加減なもの。地震の本震前のP波さえ感知できる動物は多数いる。スマトラ地震の津波の時、スリランカの象は、いち早く高台に逃れ、波にさらわれたものは全くなかったと言われる。人は体毛を失い、着物を着たせいか、あまりにも触覚が鈍すぎる。

【とはいうものの、人は訓練により、その五官は、

かなり向上するものらしい。サヴァンナで狩りをするブッシュマンの中には、視力^①の人もいるという。また時代小説によれば、老練な忍者は、敵対する相手方の忍者が近づくのを予知し、地面に耳を押し当て、呟いた。『敵は4人で、すぐ傍まで来ている。但し、心の臓の音は5人分聞こえる』と。訳を聞かれ、老忍者答えて曰く、『敵は男3人と、臨月近い、くの一が一人。5人目の心音は、腹の中のやや子だ。』……と。小説家とは、ヌケヌケと、こんな空想を設定できるのだから、羨ましい。科学で割り切れなければ、納得できないのでは、私も悲しいかな「視野狭窄症」？ これでは、私は、永遠に小説家には、なれない。】

* * * * *

さて、またまた脱線してしまつたが、人類は恐怖の場面に遭遇した時、ずつと後から進化した大脳前頭前野が、状況分析し、冷静に判断して対応を決めるなどしていたら、到底間に合わない。原始的な脳が反射的に即戦即決。俊敏に逃げるか、又はその辺の棒か石ころを手に、闘うかを決めなければならぬ。理性を司る新参者の前頭前野に、一々お伺いをたて、行動を決定するなどしていたら、命が幾つあつても、間にあわない。即戦即決の野生の判断が必要である。

それ故、ストレスなどで大脳がパニックに陥っている時には、新脳抜きで、原始的な本能行動に走ることになる。それ故、原始脳による即戦即決の判断だけではリスクが多すぎるので、もっと高次の前頭前野が進化して、類推判断などから予知能力・洞察力を獲得し、危険を未然に防ぐ機能が発達したのであろう。そして武器や生活に便利な道具を発明し、鈍い五官を補って、危険を避ける

手法が進歩したと思われる。そのうちボディーランゲージが「言語」にかわり、言葉の発達が仲間や子孫への生存技術の伝承へと発達したことだろう。そして、気候変動や自然災害などで飢餓状態が続けば、祖先霊をまつり、一族の安寧を祈願する「宗教」の原型が発達していったと思われる。文明が進化し、より豊かさを求めると、貧富の差が生じてくる。豊かな者と貧しい者との差が大きくなると、貧しいものは何とかして自分も豊かになりたいと願望する。それがかなわなければ、腕ずくで……と展開するに違いない。

生存の基本は、衣食住の充足であるが、縄文時代ぐらいまでは、数家族の共同生活と思われるので、すべて収穫物は平等に分け合つて、争いもなく平穏な暮らしであったと思われる。それが弥生時代以降、冬季や天候不順などに備え、食糧をある程度備蓄することが習慣づけられていった。そうなると、集落により、備蓄量に差が出来、いよいよ飢餓状態となれば、自ずと、略奪などが起きたに相違ない。

それが近代社会になると、貨幣を中心として、社会は回転するようになる。色々なからくりが発展し、ついには資本主義の利益追求型で、しかも、地域に限定せず、全世界が目まぐるしく回転する。ここにも持てる者と、持てない者との格差が生じ、世界規模の争いが生じる。世界の安定化を狙つて、国連など国際機関がいくつ設けられようと、自国の利益が中心で、一向に争いはなくならない。

経営者は利益を上げるために、労働者を酷使する。労働者はストレスを蓄積し、爆発寸前。耐えきれなかった者は、「旧脳」優先行動で、犯罪を犯したり、自殺に追いやられる。

結局、ストレス解消法は、ここで人類は目を覚まし、資源枯渇を招くような「経済成長至上主義」を排し、百年・千年先の子孫の安定生存を念頭に入れ、一大決心で、「スローライフの導入」こそ、人類生存の基本中の基本と考える。

暑いで熱くなって

伊東弓子

頼まれた梅干漬けから始まった夏だった。梅雨、梅雨明け、真夏の区切りもなく暑さがやって来た。夏が暑いのは当たり前と構えて体力、気力との戦いの始まりでもあった。避けて遣ないでしまう事も、人に頼まれれば対処する自分に「人いい顔する人間か」と自問自答する事もある。

韓国から娘家族が来る事がはつきりすると、楽しみと共に元気が湧いてきた。用意は早めに済ませようと自転車走らせる。

道に纏わっていくつか感じるものがあつた。高崎の一番急な坂で、枝切りをしている知りあいに合つた。強い日ざしの下で汗が瀧のように流れていた。役所から電話があつたので切つていたという。「職員はいいなあ。涼しい所で電話で命令してるんだから」と冷ややかに言つていた。百里飛行場近くの道路で小学生に合つた。細い狭い歩道に篠や小枝が覆い被さっている。そこを集団下校で帰る七人の子供だった。上級生が小枝や篠を持つて下級生を先に歩かせていた。そういう場所が何ヶ所かあつた。こういう状態を大人達(教師、市山の持ち主)は知っているのだろうか。電話はしておいたがもうすぐ学校が始まる。あれからどう

なつたかな。震災直後、高浜田圃(高浜・高崎)の県道沿いの歩道に、長い割目が出来た。そこに前のタイヤが填つて大怪我をした。警察も市も管轄が違うという土木事務所と分かつた。その揚句車道が優先との事、それならせめて「注意」の看板を立てて欲しいと頼んだがはつきりしないので「じゃあ自分で作つて立てます」と言つて電話を切つた。一応直してくれた割目に草が出た。これはい。自然は強い。人間を笑っているかのようだ。その近くでこの夏一ヶ所陥没が出来た。土木事務所へ状況を話し「遅れるんだつたら自分で小石、砂を入れてもいい」と伝えた。自分で感じた事は声にし出来る事は実行するのみ、コンクリート化した社会の中で心まで堅くならないように子供も老人も負けないでいこう。孫と随分自転車走つた。「暑いね。砂漠だ」日陰があると「オアシスだ。ああ生きかえる」と声を掛け合つてルンルン走つた。

集まつて来る子供達と、夫のリハビリの為に動物園と水族館を立ち上げた。動物園には矮鶏と子猫がいる。水族館にはざりがに、田螺、金魚がいる。その周辺には朝顔、露草、月見草が咲いて、夏草が茂り、木の枝が風を送る。成るべく子供達が身近に触れたり、語りかけたり出来るようにした。矮鶏に子供達は草をよく与えていた。卵は可哀想だから絶対食べちゃだめ、というので困つた。子猫の人氣は大変なものだ。はーちゃんがリーダーで小屋作り、お風呂に入れる等仕切つていた。寒い時の注意、目やにの手入れ、牛乳の飲ませ方等、細かく指導してくれた。誰もが抱きたくて大変な騒ぎだった。かぶと虫、蟬、蠅、蠅次々に子供達の回りに表れた。田螺、ざりがにには「風」の

配達物の帰り道とつた物が多い。金魚は去年からのが一匹と今年の祭りで掬つてきた物が仲間入りした。南(ナム)さんの釣つた鯉やアメリカ鯰も一時的に水草の影で狭そうに泳いでいた。案の定子供達の人氣の場だった。

娘の家族が来ると楽しさが増えた。南さんの小柄な体から逞しさを沢山感じたが、その一つは毎朝の魚釣りだった。竿は竹を取つてきて用意、餌や針も近くの「ココ」で求めたようだ。四時には霞ヶ浦へ出かけて日が上り始めた頃には戻つてきた。娘も子供達も一緒に行つて楽しんでたようだ。釣れたのはアメリカ鯰が主で鯉も交じつてはいた。すぐに料理して朝の食膳に並んだ。野菜を入れて韓国風の汁、私もフライを作つてみた。娘には湖の状況を話しておいた。子供達の力は素晴らしいと思つた。滅多に出来ない次男も、大きくなつた孫達も、寄つてきてくれた。年の近いハーちゃんや妹の孫達との遊びも毎日続いた。子供には人を引き寄せてくれる力がある。教えて貰う事も沢山あつた。私にとって気力も体力も相当の消耗だった。

楽しさの中に時代のずれを感じた事があつた。一回はプール遊びの事だった。当日の朝、時間確認で電話すると、ハーちゃんが「どうしようかと迷っている」という話しの中に「タトウ」という言葉があつた。それを消毒液の名かと勘違いしてしまつた。私の常識の無さと思ひ込みが妹や娘を悩ますものになつたが、当人は大喜びで走つてきて「タトウ」は消えてもいい。またつけるから」と言う。見ると腕に花がついてた。ああこれかと分かつた次第だった。もう一回は高浜小学校の木の下でフルーツバスケットの遊びをした時だ

った。五才のたけちゃんが「クロックス履いている人」と聞こえたが動かずにいると「婆ちゃんも履いているから動かなきゃだめ、鬼だよ」という。私はサンダルと想っていたが「クロックス」だそう。サンダルともいうよ、と言ってみたが、どうなのか。玉里のBGに行った時だった。一年前遊んだ楽しさをマーちゃんは胸に、春に私と来たハーちゃんも足どり軽く来たのだった。目的の遊具二つとも壊れてなかった。草刈りをしていた知り合いの話では、壊れた物は直さないという。事務所の人は事務をとだけで、BG内を見回る事もしないらしい。全てが壊れてなくなってもいいのだろうか。地域の遊び場を求めてくる人や、その遊具管理もせず、何がサッカー場だ、と言いたい。

夫に声かける事が少なくなった自分に気がついた。暑さに負けて寝ている事が多い。自分の仕事も誰かに甘えている節がある。沈黙が多いが、一年生のティオンとの会話は、他の人と違うのが分かる。退化していくんじゃないかと思つたが、人が多ければ刺激も多い、大丈夫、大丈夫と一人納得しているが、疲れからくる逃げ口上かもしれない。息子が大片付を始めた。年月と共に押つけ仕事で溜まった親の物の片付けた。今迄出来なってきた二人はただ申し訳ないと思うだけで、仕事の合間にしている息子の体を気遣うだけだ。人間が増えたと心配り、作業量の増え、時間帯の使い方、工夫等訓むまで努力がいる。

高浜の町が臭くなつた。臭くて息もつけない。頭も痛くなり、体も可笑しくなりそう、という妹の声に行ってみた。高浜に面する山王川付近から山王川にかけて地獄を見たようだ。水面は全く

緑で覆われ動かない。何とも不気味な様だ。そして悪臭が漂ってくる。窓も開けてはいられないそうだ。妹は勿論、高浜の人達が役所へ訴えたそう。だ。やっと作業が始まって分かった事は、霞ヶ浦のへどろ、あおこが南風に吹き寄せられて高浜周辺に吹き溜まりとなったと説明があったそうだ。高崎も臭く緑が濃くなっていた。ある晩息子が大型火花をやってくれるというので、喜んで堤防に行った。その時汲み上げた水は緑色のペンキそのものようだった。火花の灯の舞に歓声をあげる子供達と、不気味な緑の水面の沈黙が夏の夜のひとときを寄り添っていた。高浜のご新盆参りの自宅であおこの話が出た。もう少し取るといいんだが、千何百万円かかるそうだ。高浜地域で出すと

か、高浜だけそんなに金かけてもらうんでは税金の無駄使いだろうとかで、やめたそうだ。冗談じゃない。一つの町の問題じゃないだろう。市、県、国あげて考えなければならぬ筈だ。人間が造った堤防が人間を悩ます事になり、湖の長い歴史の終末も感じる。土浦方面ではこの水を飲んでい

るのだから、恐ろしい事だ。水辺ばかりではない東田中で恐ろしい光景を見た。バイパスの通る神社の傍の傾斜地だった。木を切った後株が残っている。草も枯れ土が流れて大木の切り株が顔を出して久しいのだろう。二十株ちかくが白く風化し巨大な頭蓋骨のよう。むきだしした根は歯のように見える。その様は人間が便利さと引替に、自然をお金にかえた恨みの表情に見えた。

で先祖を迎える人の姿を見ながら、曾祖父ちゃん曾祖母ちゃんがいる荒川沖に行つて手伝つてくれた。送り盆の夜も平山の男の子達二十人の盆綱おくりが終わって火花をしている所で一休みして、その雰囲気の中に加わった。汚れた湖も波静かに先祖を送っている様子だった。飛行機の中で絵日記を書きながら帰った孫達、明日から学校が始まるのだから、頑張つて行くことだろう。

暑い夏だ。盆が過ぎたら一層暑かった。孫達が帰ったら尚一層暑くなった。そんな中で私も熱くなつて出来事の一つ一つを感じた。大部草臥れた面もあるが、心を熱く燃やし続けていきたい。

茨城廃寺跡Ⅱ第四次調査速報展Ⅱ 兼平ちえこ

石岡市では今年、平成二十四年三月二十一日、貝地地区にあります茨城廃寺跡が新たに市指定文化財として誕生しました。市指定文化財とは「市内に存するもののうち、重要なものについて、その保存及び活用のために必要な措置を講じ、もつて市民の文化的向上に資するとともに、我が国文化の進歩に貢献することを目的とする」と石岡市文化財保護条例第一条に定められています。

文化財の中には史跡（歴史上の遺跡）や、文化財保護法で保護の対象となつているもので、有形文化財、無形文化財のほか天然記念物、民俗文化財、そして伝統的建造物群があります。

今回誕生の市指定文化財、茨城廃寺跡は、昭和五十四～五十六年（第一～三次）の発掘調査によつて八世紀後半頃に建立されたといわれている常陸国

分寺より古い寺院であることがわかりました。

それではここから昭和五十四年に遡って、三年計画で行われた発掘調査の報告を石岡市教育委員会発行の「石岡市の遺跡」より一部抜粋して見ましよう。

JR常磐線石岡駅から六号国道線に向かい交差点を越えそのまま進むと高浜街道に突き当たる。そこから街道をわたり、小路(幅二m位)を南へ(百m位)入ったところに茨城廃寺跡があります。

この茨城廃寺跡一帯はかつては一面畑であり、古瓦の破片が散布し、また付近の寺院や畑には此の地から運び出されたとされる円柱座造り出しをもつ見事な礎石や露盤(塔の一番上で方形の屋根を押さへ飾りの相輪を通す穴が開いている石)が存在していることから、この地に古い寺院があったと古くからいわれてきました。

近年、廃寺跡付近は宅地化が進んでいることから、石岡市教育委員会は宅地化される前に寺院の全容を明らかにしておくため調査が行われました。

第一次調査は、昭和五十四年八月四日から二十日まで行われた。まず南側と北側に認められる若干の高まりを対象に南北に長いトレンチを一本ずつ設け掘り下げた。掘り下げを開始したその日に建物跡が発見され、南側の一号基壇を平面形と規模から塔跡と推定し、北側の二号基壇は金堂と講堂の両者が考えられるが、「性格を決めるには材料に乏しい」としたうえで金堂を想定している。

第二次調査は昭和五十五年七月二十三日から八月二十一日まで行われ、この調査は一次調査で確認した二つの基壇の、その正確な規模と築造技法などを明らかにすることが目的であった。塔基壇であることの確認と、規模から金堂ではなくして

講堂であると一次調査の結論を訂正している。

第三次調査は、二次調査までの不明の金堂跡を明らかにし伽藍の型式を確認することと、寺域を明らかにすることの二点を目的として、昭和五十六年七月二十二日から八月二十日まで行われた。

金堂の存在が予想される位置は、塔基壇の東側であるが、そこには小住宅が六棟も立てられており、そこで建物と建物の間にトレンチを三本設け掘り下げたところ、想定は的中し東西十六m、南北十一mの基壇を確認することができ、塔、講堂の基壇と比べ堅固で丁寧に築かれていることが確かめられた。こうしてこの寺は東は金堂、西に塔を並べ、その北側に講堂を配する法隆寺式伽藍配置であることが確定した。その他この三次調査では北限の溝の内外から四十軒近い堅穴住居跡も確認された。そのうち溝の南側に存在する十九軒が調査され住居跡間には、切り合い(専門用語であり、重複に相当)がはげしく、長期間にわたり住居が存在していたことを物語っている。

三次にわたる調査で出土した大量の瓦によって八世紀中頃には寺の伽藍の整備が完成したと考えられている。しかし瓦から寺の終末を知ることとはできないが出土している土器などから十世紀後半ごろと考えられています。

それでは出土品をご紹介します。先に述べました北限の溝あたりからは土師器(素焼きの赤褐色の土器)が投げ捨てられた状態で出土、土師器はおもに坏類であり、油脂状の炭化物が付着している物が多くみられことから、寺の灯明に用いられた物と考えられている。それらの坏類の底や側面に「茨木寺」あるいは「茨寺」と墨で文字が書かれた物が発見され調査の皆さんにとって大きな驚き

であつたそうです。ほかに「南院」「東院」「西房」「文殊」など発見され、「茨木寺」には南院、東院などと呼ばれた建物があつたことや、文殊菩薩を脇侍とする釈迦三尊像が安置されていたことなどがうかがえるそうです。そのほか蓋、高台付坏、円面硯、須恵器(大陸系技術による素焼の土器、良質粘土で成形にはろくろを使用)、土器以外では「和銅開珎」、二彩の狛犬、銅椀、銅製帶金具、釘などの鉄製品等等、住居の年代を知る手がかりとして重要とされています。

以上の調査から三十年振り、平成二十四年一月より第四次発掘調査が行われました。広報いしおかー時の記憶―シリーズ八一に掲載されていますが、それによりますと、古代の寺院や役所では溝で敷地を囲み周囲と区別していました。今回の調査はこの溝(区画溝)を探すことで、寺の範囲を確定することを目的とし、溝の北東コーナー部分の発見、今まで推測でしかなかった寺の北限の確定、そして東側を推測する大きな手がかりを得、平成二十三年度の第四次調査は多くの成果をあげました。

現在、「茨城廃寺跡―第四次調査速報展―」石岡市民俗資料館(TEL0299-2312398)にて開催中です。九月一〜三十日まで午前九時〜午後四時半、金、土、日、祝日のみ開館、入場無料。石岡駅より徒歩十二・三分、石岡市立石岡小学校敷地内(石岡市民会館裏側になります)。

九月十五、十六、十七日常陸國總社宮大祭(石岡のおまつり)も行われます。(總社宮は隣になります)

この機会に是非、民俗資料館にお立ち寄りになり、飛鳥時代末から奈良時代にかけて隆盛を誇った茨城郡の郡寺を思い描きながら古の人々との対

話を試みて下さい。

尚、石岡のおまつりの最終日九月十七日には、私も館内でお待ちしております。

・ 太陽吠える 木陰に身ちぢめて ちえこ

「日本国」とは…

小林幸枝

最近、日本の領土に関する問題がテレビを賑わせている。北方領土、竹島、尖閣列島。どの島も日本の固有の領土である筈なのに、日本の対応が遠慮がちに見えるのは私だけだろうか。

日本の政府は何で自分の領土の事を、はつきりと主張して守ろうとしないのだろうか。また、韓国も中国もどうしてあんなに極端な民族主義になつてしまうのだろうかと思議に思う。

北方領土も竹島も戦争の後遺症のような形で略奪されたようなものだと思う。尖閣諸島に関しては海底資源が言われ始めて中国が主張してきた。

太平洋戦争後、日本人は極端な民族主義から解放され自由にものを言えるようになり、戦争を放棄した憲法で平和を得ることが出来た。でも、平和の中でハッキリと物を言うことを何処かに置いてきたのではないだろうか。

論戦は、武器を持つての戦争ではない。論戦すらも放棄してしまったら、自分達の権利をどう主張すればいいのだろうか。特に国際社会では、自己主張の出来ない国は、国として認めてはもらえないだろう。

経済成長も低迷し、日本の金融格付けは落とさ

れている。このままだと日本は日本で無くなつてしまふのではないかと心配だ。

中国や韓国では教科書に民族主義をあおるような内容が書かれているようだ。民族主義の偏った見方で覚えた歴史を子供達は皆、そのことが事実として疑問すら持たないような状況だといえる。

七十年前のように国全体が民族主義になつてしまったら困るが、自分を、我が国をはつきりと主張することが大事な事だろうと思う。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光（3.2）

頼朝が、現地に何名かの武将を残して鎌倉へ帰還したのは十月に入ってからのものである。しかし翌年には藤原泰衡の旧臣で出羽国に居た大河兼任一族が七千騎を従えて秋田城、多賀城を落とし、鎌倉に向かって進撃を開始した。頼朝も三十万の軍勢を解散させた後なので、本気で攻めて来られると危なかった。この軍勢は途中で凍った湖水を渡り、氷が溶けて多くの将兵が凍死したらしい。それでも屈することなく進撃してくるので胆を冷やした頼朝は信越地方の御家人に防がせようとして失敗した。結局、頼朝は奥州出兵をもう一度繰り返すことになり、二か月かけてやっと平定したのである。怒った頼朝は朝廷が任命していた現地の役人の責任を追及して膨大な賠償をさせていると言われるが本来の責任は頼朝にある筈？

この事件は奥羽地方の人々を甘く見ていた頼朝に痛烈なパンチを与えたようなもので、これを機に頼朝は陸奥・出羽両国を自分の知行地にしようとして朝廷に願ひ出たといわれる。建久元年（一一九〇）十月初旬には、その目的かどうか上京して後白河法皇に拝謁している。この行列には奥州征伐の殊勲により畠山重忠が先陣の役を命じられ、それに続いて三騎ずつの武士が一番から六十番まで並んで前衛を務め、後衛は一番から四十六番という物々しさであつた。前・後衛だけでも三百騎以上の武者は、いずれも一国一城の主で常陸大掾本流の多氣太郎義幹は前衛五十一番に、水戸に居てやがて石岡に来る馬場系大掾の資幹は前衛九番に付いている。余計なことだが此の番号は前衛の場合は大きい（頼朝に近い）ほうが格上である。行列後陣の将は大豪族・千葉常胤が勤めた。其処までも、奥州知行地化は許される筈がなく苦肉の策で頼朝は有力御家人たちを各地に配置し、それを統括する奥州惣奉行や陸奥国府の留守所長官を通じて間接的に東北地方を把握した。最初に葛西、伊澤、二階堂、工藤、南部、和田、曾我、小野寺、浅利、熊谷、千葉、菅原、長江、中条、加藤、渋谷、山内首藤、大河戸、和賀などの武士が地頭・郡司・荘司などに任命され、或いは現地採用されたように思える。奥州藤原氏に従っていた在地豪族でも恭順した者は許された。これらの武士たちにも衰退があり頼朝の死、北条氏の台頭、南北朝時代の混乱に続く足利氏の支配など目まぐるしい権力の変遷に影響されたようである。時代ごとの地頭その他の名称は伝えられていないが戦国時代には、ほぼ現在の東北六県を形成する基になる津軽、秋田、南部、最上、伊達、蘆名ら

の大名が出そろっていたようである。このうち先祖が茨城出身である伊達政宗は「天下の副將軍」を真似した訳ではないが、あれこれと問題を惹き起こしている。その事件の一つに源頼朝の遺児・千鶴丸の子孫と称した和賀氏との関わりがある。流れとしては其の話に続けたいところではあるが出发点が平安時代末期から鎌倉時代に及ぶことなので、まずは源頼朝の奥州支配で振り回された祖先のことから述べてゆくことにする。

東国に居ながら、源頼朝の命令で奥羽地方へ転勤させられた武將たちは、文句の一つも言いたいところを我慢して、指定された任地へと赴いた。岩手県史によれば、このうち滅ぼされた藤原氏のお膝元であった陸中地方は、平泉周辺の磐井郡など南部に「陸奥国御家人惣奉行」である葛西氏が配され奥北の糠部や久慈には北条氏が置かれた。そして現在の北上市を中心とした和賀郡には「和賀氏」の名が記録されている。名前を聞いただけでは饅頭や大福餅と間違えそうな和賀氏とは、どういう系統の武士団なのであろうか。

地名と苗字が同じなので土着豪族のようにも思えるが、素性について幾つかの説があり、どれが真実かは分からない。そしてこの家系に、第三章後編に於いて伊豆山中で殺害された筈の「千鶴丸」が幽霊では無く登場してくるのである。戦乱の世を生き抜いたこの一族は豊臣秀吉の「奥州仕置」で消滅させられた。その裏には伊達政宗の策謀があったので後ほど触れるのは、そのことである。そして歴史は何とも面白いが、和賀氏の末流は明治維新まで残った。それも石岡のすぐ近くに。新版の岩手県史では、確証は無いとしながらも和賀氏として地頭になった義勝坊成尋（ぎしょう

ぼうじょうじん）こと中条兼綱の名を挙げている。源頼朝が石橋山に挙兵したときから味方に付いていた「武蔵七党」の一つ、横山党の一族とされる人物で本姓は小野氏という。小野氏は神話時代の第五代・孝昭天皇の皇子・天足彦国押人命（やまとたらしひこくにおしひこのみこと）との子孫とされ、天武天皇時代に朝臣（あそん）の称号を貰った。遣唐使として知られる小野妹子を始め、小野篁（おののたかむら）学者、小野小町（歌人）などは同族であろうか。

和賀の地頭・義勝坊成尋の子の義季は、宮城県荊田郡の地頭に補されて荊田氏を名乗り、さらに幕府重臣である和田義盛の養子になったとする。一時的には和田氏が地頭だった可能性があるかも知れない。成尋のもう一人の子は和賀郡の北隣にある稗貫郡の地頭に補されて、鎌倉幕府に最高議決機関の「評定衆」が出来る、その一員として重きを成した。そして小田氏の祖・八田知家の養子になる。小田系図による十男の家長である。義勝坊成尋は自分で和賀氏を継いだ上に息子をやたらと幕府有力者の養子に送りこんでいたらしい。

そこから推測すると古くから和賀地方に居て、頼朝の奥州遠征に協力したか抵抗しなかったか、とにかく藤原泰衡に味方せず寝た振りをしていた和賀氏が、頼朝に服従の態度を見せるために和賀の地頭職を返上する姿勢を見せた。そこで頼朝は腹心の義勝坊に処置を任せた。義勝坊は自分で継いだか、息子を養子に送り込んだかして和賀の領地を手に入れた？和田義盛の養子になった義勝坊成尋の子が本来は小野姓なのに桓武平氏系の和田氏の養子になり、それがさらに清和源氏の和賀氏を継承したことによる本姓の混乱が室町時代の神社

札などに残ることを岩手県史が触れている。

その和賀氏は、頼朝と同じく清和源氏である。

頼朝の五代前になる頼信は、兄の頼光に後見されて武士として成長し兄の準養子になった。頼光の子・頼国は清和源氏嫡流で諸国の国司を歴任したが、その子孫は律儀なのか野心が無かったのか武士本来の職務である官廷武家として地道に勤めた人物が多かった。摂津国（大阪）多田（現在の河西市）を本拠とし「多田源氏」を称していた。

清和源氏の「嫡流」がこの系統から源頼朝の系統に移った経緯は第四章の前編で述べた。頼国の子・頼綱の孫が「平家打倒」の口火を切った源三位頼政である。頼政の従兄弟は行国と言い多田源氏として地道な武士団を形成していたが、孫の行綱が「鹿ヶ谷の変」で平家打倒の陰謀に加担しながら寝返りで密告をした。行綱はそのまま平家側に付いていたが、頼朝が挙兵し源平の合戦が激しくなってくると平家軍を離脱して強盗団の真似ごとのように戦場荒らしをしていた。源氏に味方をする予定で行動したらしいが、さすがに頼朝は許さず所領を没収したと言われる。

その影響もあって明確ではないのだが、行綱の従兄弟に源盛義という人物が居り、其の辺りから多田源氏が陸奥国に定着して和賀氏となったようである。「和賀氏は多田源氏を称した」と現地の古い郷土史などに記載されているらしく、戦国時代の末期に秋田県仙北平野を抑えていた藤原系豪族である小野寺氏の興亡を記した「小野寺盛衰記」にも書いてある。関西に居た多田源氏が東北地方に來た理由は、前九年の役又は後三年の役に際し源頼義又は義家に従って來たことが推定される。

どの武家でも同じだが、鎌倉幕府（北条氏）が

滅び、朝廷が南北に分かれて争った時代には下克上の意識が強くなったこともあって、離合集散が激しく「家系」なるものが混乱したと思われる。

「何処の馬の骨」だか分からなかった武士団にはチャンスである。裾野の広い桓武平氏とか役者の多い清和源氏などが売れ筋で専門の系図屋が活躍したらしい。徳川が天下を取った際に、諸大名の「家系」を申告させたところ源氏、平家、藤原氏、橘氏を始め全ての家が名流の子孫になっていて、特に清和源氏が多かった。事務を担当した新井白石が「…これで良いので有ろうか？」と心配したけれども、徳川氏そのものが「流れ坊主」を「源氏系新田氏」にしていたから「申告どおりに黙認する」しかなかったのである。

話を奥州の和賀氏に戻すと、何処の系図屋に頼んだかは伝わっていないが、概ね次のような家系が出来上がったのである。清和源氏の代表として足柄山の金太郎の親分である源頼光を頭に――頼国――頼綱――明国――行国――行義――盛義――義治…。

これは既に述べたように和賀氏を清和源氏が多田系とした場合の推定系図であるが、同じ源氏でも頼光さんの弟で大和源氏を称した源義親の子孫とする少数意見がある。義親は、藤原氏の氏寺であり奈良の黒幕のように威張っていた興福寺と争って罪人にされた。従って子孫も埋もれていたけれども多田系と同じように前九年の役に源頼義に従って奥州入りし、そのまま土着した者がいる。義治に続く和賀氏後代の子孫の名に「親」の字が多いから、この説も嘘だとは言いい切れない。

もう一つ、気になることは和賀郡の地頭に補された武士の数が多いことである。多分、藤原氏のお膝元に近かった地域の管理者は頻繁に変わり鎌

倉武士が関わる機会が多かった。これは私の勝手な推測であるが、伝わる和賀氏の家系に混乱が見られるのも、その所為であろう。どうも源頼朝の奥州支配により、其れまでは三流であった「清和源氏の株」が市場で急激に上がり出して、北上地方に埋もれていた「和賀氏」の後継を中小武士団が狙い始めたらしい。人気株は誰もが欲しがる。本来の和賀地方は、古代の名族・和我君計安皇（わがのみけあるい）の本拠地として歴史的にも重要な土地なのである。計安皇は、坂上田村麻呂が出しやばってくる時代より六十年も前に大和朝廷から派遣された大野東人（おおののあずまびと）に協力して奥地の街道を開き、現地の人々に危害を及ぼすことなく地域を安定させた人物と言われている。計安皇の子孫が豪族として和賀に残って居たかも知れないが、記録はない。

そういう土地に最初に定着し、表向きは多田源氏の系統を伝えてきた和賀氏は義治の代に主筋の藤原氏が頼朝に滅ぼされて支配者が変わった上に継嗣が絶えたのである。評判の良い和賀地方は地頭などを命じられた武士団が支配することになり源氏、北条、和田、佐々木、中条（小野）などの武将が着任したが、いずれも短期間で交代させられたことが推測できる。その理由は和賀郡の持つ特性と言うか特殊条件にあった。

奥州に攻め込んで来た大軍を阿津賀志山で防ぐ予定だった藤原国衡が、自分の馬の苦勞を察してやらなかったばかりに、深田に立ち往生をして源氏軍に討ち取られたことは既に述べた。その馬は高楯黒という絶対に汗をかかない名馬であった。また熊谷次郎直実が出陣に当り大金を投じて名馬を求めたことは知られている。武将にとって馬は不

可欠の武器であり、命を託す相棒でもあった。和賀地方は幾つかの牧を有し、優れた馬を産する土地だったのであるが、家庭菜園で作る馬鈴薯と違い名馬を育て、これを世に出すには普通の武士では無理である。恐らくは、その為に和賀の主が頻繁に交代させられたのであろう。早くから土着していた多田源氏も馬の飼育は出来なかった。折角、奥州を支配しても、駄洒落ではなく「ウマがウマく育てられずワガのウマがワガママになること」を憂慮した頼朝は、或る人物に命じて和賀を含む「奥六郡」と呼ばれた地方を軍馬生産の基地にすることを思いついたのである。指名された気の毒な武士は武田の一族である。

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。
どうぞよろしくお願いいたします。

9月9日 里山と風の音コンサート

9月30日 高野行進 jazz live

10月6日 谷島崇徳・谷島あかねギターとピアノデュオ

10月7日 長谷川きよしコンサート

10月14日 ハープとフルートのコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

源頼朝が兵を挙げる際に舅の北条時政は甲斐の国へ行って甲斐源氏の頭領である武田信義に決起を要請した。信義の祖父は、八幡太郎義家の弟・新羅三郎義光の子で佐竹氏の祖・義業の弟になる。常陸の国から甲斐の国に移り、子孫を武田、逸見、一条、秋山、小笠原、安田、南部などの地に定着させて甲斐源氏の強力な地盤を作った。戦国時代に武田信玄が活躍出来たのも、そのお蔭である。魏志倭人伝には「日本に馬が居ない」と書いてあるらしいが、常陸国風土記には行方郡に小型の馬が居たと記録しているから、地域によっては鹿と間違えうような馬が居て、その区別が出来ない者のことを「馬鹿」と呼んだのかも知れない。甲斐の国つまり山梨県には巨摩郡があるように、聖武天皇時代辺りから「牧(まき)」が置かれ、馬を献上していたようなので、其処に土着した源氏の一族も早くから「甲斐駒」の飼育を行っていたものと思われる。その技術で時に逸物が出る東北の馬を何とかしよう：頼朝の狙いである。

文治五年(一一八九)―この年代には疑問があるのだが：頼朝は武田信義の甥に当る南部三郎光行を奥州糠部(ぬかのべ)青森から岩手にかけての地に封じた。この家が後の南部藩の基になる。南部氏はその拠点を盛岡に置いた。余談になるが甲斐の南部領は光行の息子(波木井実長)が継ぎ領内の身延山に日蓮上人を招く。それが文永十一年(一二七四)とされるから、父親の光行が奥州へ行かされた年代が合わない。「藩翰譜(南部)」には「…何れの代なると云う事詳かならず…」とあるから文治五年がずっと遅れるかも知れない。脱線ついでに紹介しておく日蓮上人は身延山に八年ほど居たが、甲州の山は雪も積もり寒さも厳

しい。それまでの苦難で健康を損ねていた日蓮は常陸の国へ行くことにした。当時の日本でマトモな医者が居たのは京、鎌倉と常陸国府(石岡)ぐらいであつたらしく、日蓮は石岡保健所で診て貰つてから御前山辺りに在った波木井実長領地の温泉で治療する予定を立てていたのである。しかし馬で石岡へ来る途中、東京・池上の信者宅で病状が悪化し、滞在中に六十一歳の生涯を終えた。現在の石岡からは想像も出来ない話であるが、是は事実らしい。日蓮宗も、やたらに学会ばかり作って争っていないで、そう言う歴史を伝えるべきではなからうか：ともかく、南部三郎光行は貧乏籤(くじ)を引いて父祖の地・甲斐から奥羽地方へ転勤させられたのである。長旅になるため家臣も全員を連れて行く訳にはいかない。最小限の人数を選んで同行させたのであるが、その中に一人の少年が加わって居て、家臣は元より主の光行も何かとその少年に気を使う様子であつた。

(続く)

【風の談話室】

長かった猛暑の夏もようやく終わりを迎えようとしている。夏の暑さは年々厳しさを増している。北極の氷も南極の氷も解けだしてきている。海水の高が増えたせいではないだろうが、大きな地震が世界のあちこちに起きている。カルトの予言ではないが世紀末が近づいて来ているということなのだろうか。そんな事は全く信じるに足らないことであるが、温暖化は矢張り人災だろうと思う。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

菊日和

田島早苗

何時も出歩いてばかりだった私が秋風に誘われたように庭いじりを始めた。本格的に野菜畑を作ろうと庭木を抜いたり移し替えたり、渋る夫を巻き込んでの大仕事になってしまった。「食の安全が信じられないので、自衛のために野菜作りを始めるの」と宣言する私に、「今は直売所もあるし、買った方が安いよ」と友の疑いの眼が笑っている。

美浦村に移り住んで四十年余り今迄も時々庭隅で野菜作りに挑戦したこともあつたが、成功には程遠い成績ばかりだった。『千に一つの無駄花もない』と言われる茄子さえも私の畑では、ほんの僅か小さな実を結ぶのみだった。友が危ぶむのも無理のない話だ。

でも毎日のように繰り返される食の偽装報道を聞いているうちに「今度こそは成功させなければ」との思いが募り、皆に宣伝して、逃げ道を塞いってしまったのだった。

庭の菊の香に包まれながら、スコップと鋸を使って木の根っこを掘るといふ、とんでもない重労働にへこたれながら、思いは遙か遠く小学生の頃へ飛んでいた。

半分以上は農家だという岐阜市の片田舎の村に、サラリーマンの子として生を受け、六年生の時に終戦を迎えた戦中派の私は、毎日お中を空かしなが瘦せ我慢をすることで何とか矜持を保っていた。

戦争も末期になると、勉強らしいことはほとんどなく、毎日鋤を担ぎ、報国農場という名目で石

ころだらけの道の両脇を開墾して豆を蒔いたり、校庭を開墾して蒔苗を植えたり、の作業に駆り出されていた。それまで農業という物にまるで縁のなかった私にとって、それは拷問のような日々だった。

その頃の肥料と言えば下肥がほとんどで、農家の小父さんが少しばかりの野菜等を持って汲み取りにやって来られると、申し訳ないが鼻をつまんで逃げ回っていた私。

ところがある日、校庭の畑に下肥を撒くことになった。二人一組になって天秤棒で肥桶を担ぐ係、それを柄杓で撒く係、それぞれの分担が決められ作業が始まった。

皆が必至で頑張っている中、私は吐き気がこみ上げて来て、真つ青な顔で座り込んでしまった。誰かが「お姫様！ お姫様！」と囁し出し、皆の冷たい視線が突き刺さる。とうとう泣き出した私の柄杓を黙って取り上げ、さつさと下肥を撒き始めたのは、普段は温和なしい同級生の女の子だった。シーンと静まり返った校庭の中で、頬を紅潮させながら黙々と柄杓を動かしていたその姿が忘れられない。

すっかり忘れっぽくなった今日この頃の私だが、あの日の情けない自分の姿は、悔しさと嬉しさの入り交じった涙の味と共に、まるで昨日のこのように心に焼き付いている。

昭和二十年七月十日岐阜市の大空襲で我が家は焼け出され、丸裸になってしまった。飢えと寒さに震えている子供を四人も抱えて母の苦労は並大抵のことではなかった。そんな母の姿を見ながら、六年生の私は少しでも母の助けになりたいと、何時も小さな胸を痛めていた。貧しかったがそこに

は固い親子の絆が息づいていた。

皆が中流意識を持ち、豊かな物に囲まれて暮らしながら、人と人との繋がりが希薄になり、常識では理解できない事件が次々に起きている現代には、まだまだ戦中派の出番が残されているのでは？ 老いぼれては居られないと、後期高齢者の婆の繰り言は尽きない。

「この畑は今年中に出来上がるだろうか」

「いや何が何でも作り上げなければ」と自問自答を繰り返しながらがんばっている私。もしかしたら来春には見事な(?) 野菜を皆さんにお裾分けできるかも……。

戦中派馴れぬ鉄振る菊日和 早苗

右の文章を書いてから四年の月日が流れ、我が家の庭には少しは畑らしい作物が植えられる様になった。

と言えば格好良い話だが、見るに見かねた友達が、鋏で庭中をあつという間に畑に変えて下さったお蔭だった。未だに肥料の施し方も判らないが、出来の良くない茄子や胡瓜、ミニトマトなどを、まるで宝物の如く収穫して、友との絆の有り難さを噛み締めている私だった。

朝採りのトマトルビーの如光る 早苗

《ことば座だより》

不思議の縁

白井啓治

映画や演劇の世界は非常に狭い社会と言えるが、その世界での人的交流となるともっと小さくなってしまう。一緒に仕事をしない限りはなかなか交流を持つことはない。

しかし、何かの切っ掛けで交流を持つと、どういうわけかその知人友人、先輩、先生達の皆がごくごく近い関係者であつたりする。あッ、そうだったの、という仲になってしまう。

7月末に、ホルストが伊藤道郎の依頼で作曲した日本組曲を主題とした舞台を創りたいので協力してくれと弟子伝え、打ち合わせに行ったところ、後でその弟子から以前からプロデュースしているパントマイムのヨネヤママコ女史が、伊藤道郎さんから指導を受け、伊藤道郎の舞台に立ったことがあると話しておられました、と連絡が来た。

8月の末に再度弟子との打ち合わせに出かけたら、その日たまたまマコ女史と次の公演のピアノ合わせか何かをやっていた。打ち合わせ後、紹介されて色々と話をしていたら、伊藤道郎には随分を可愛がってもらい、アメリカへ行くにあたって色々細かなアドバイスをもらったのだそう。伊藤道郎の演出する舞台にも立ったとの事であった。

マコ女史のパントマイムは、マルセロマルソ一の演ずるパントマイムとはかなり雰囲気の違い舞踏的な要素が大きいと思っていたら、子供の頃にバレーからスタートしたことに加え伊藤道郎の指導を受けた事などで独特のマイムになったことが知れた。

その時、マコ女史は、「当時は私も若く何となく感じたただただのだけれど、今に思うと道郎先生は死を予感されていたように思う。マコに

は持つてるものの全てをあげるからね。そんな風に仰られる様な指導だった」と話していた。

柏木久美子さんと知り合い、一緒に舞台を創るようになり、すっかり忘れていた伊藤道郎を思い出し、その門下生が小生の知人の奥さんだったりと急に柏木さんとの距離が縮まった。そして、ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」の存在を知り、その曲をモチーフにした舞台を6月の公演で行った。この舞劇をもう少しパワーアップして東京公演にしたいと思い、動きはじめた途端今度はヨネヤママコ女史の出現である。実に不思議の縁が次々と繋がってやってきた。

弟子曰く、一つのテーマを取り上げたとき、それが色々な縁に繋がって行くことは、それをやれということだから是非やろうと言う。音楽監督担当は弟子のご主人でクラリネット奏者がやって貰えることとなった。彼は、ママコ女史のバックミュージックも担当しているのでなかなか面白い展開になりそうである。

確かに映画であれ舞台であれ、こんな作品を作りたいと企画書を書き行動を開始しても、その企画が人の繋がりを生んでくれないものであれば、如何に優れた内容であったとしても実現は難しい。一つの企画を何年も抱いて、作品化しようという行動していても人の縁の繋がりの生まれてこないものは、企画書で終わってしまうものだ。

ホルストの日本組曲を主題とする舞踏劇には、何となく縁の繋がりが大きく動きそうな感じがする。縁の繋がりが更に大きくなって来れば愉快的な舞台が実現できるのではないかと思っている。

9月9日は、オカリナの野口喜広さんとの「里山と風の声コンサート」である。今回で三回目と

なる。今回は、第一部に私とピアノの山本光君とで「風の言葉」と題してそれぞれのイメージでピアノ演奏と詩の朗読を行う。第二部は、野口さんのニューアルバム記念コンサートとなる。

ピアノと朗読による「風の言葉」の（はじまりの言葉）を以下に紹介しましょう。

× × ×

言葉とは芸術です。

人が言葉を創造したのは物事の説明をするためではありません。

あなたに私の心を表現して伝える芸術として創造されたのです。

言葉とは芸術です。

芸術とは愛を詠うことです。

あなたに私の愛を詠うための芸術として言葉は創造されたのです。

私の心は風が知っています。

風のささやく言葉は私の心の声。

風は里山の雑木林を抜けてサラサラと声を告げて去っていく。

私の頬に風の手紙がささやいた。

サラサラと

ゆるゆると

そして静々と流れて時の思う。

風は言葉。

風が私に教えてくれた。

言葉は

私の命を愛を詠う芸術です。

今回は、久しぶりに16ページの会報となりました

た。何時もより4ページ少ない夏休みバージョンです。あまりに猛暑の夏でしたが、皆様にはお変わりありませんか。電力不足を言われていたが、余裕の電力消費でした。意図的な不安情報に惑わされぬ利口な日本人であった事に自信を持ちたいものです。

(ひろが)

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

《ふるの》

アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(大)「つらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0660-43-0000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>